献呈のことば――樋口浩造先生のご退職にあたって――

樋口浩造先生は、本学での二八年半にわたる教員生活を終えられ、今年度を以てご退職なさいます。樋口先生に本論集をささげるにあたり、私たちは、教育者であり研究者としての樋口先生の思想と行動を、二〇二一年度から三年間務められた日本文化学部長として独自に構想し、二〇二二年度から実施された「ポリフォニー的世界の窓」の企画趣旨に見出します――「歴史に埋もれさせてはならない事実に目を向け、社会にかき消されてはならない声に耳を傾ける」。その要諦は、強者が生み出す戦争の歴史の裏あるいは陰に目を向け、そこに追いやられ置き去りにされてきた名もなき人びとの苦難の歴史を一つひとつ丹念に掘り起こして向き合おうとされる、人間としての優しさであり誇りにあると思います。このことは、日本近世の思想史研究から出発された樋口先生がその後、日本史だけでなく、朝鮮史学や宗教学関連の学会にも深く関わってこられたご研究の経歴に連なります。樋口先生のご研究には常に、ご専門や国境を越えた学際的かつ国際的な眼が据えられてきました。

樋口先生の徹底した現場主義の実践は主に、中国、台湾、朝鮮、韓国を対象とする日本の近代思想史や戦争の記憶・表象に関する東アジアの比較思想史の研究や教育で展開されました。戦前の日本が中国の人びとを強制連行した末の花岡事件の現場（現在の秋田県大館市）や戦後日本が苦難を強いた沖縄はもとより、在日朝鮮人学校無償化裁判に足を運び、中国、台湾、東南アジア諸国での学外研究活動を続けてこられたことは、私たちのよく知るところです。樋口先生の教育研究を貫くこうした姿勢は、学生に勇気を与え、彼らの行動を突き動かしてきました。決して留学希望者が多くはないこの学部において、何人もの指導生が中国や韓国への留学を経験するばかりか、それらの国々からの留学生の多くを指導生として受け入れてこられたからです。他の学部にはあまり見られない学部所属の全教員と留学生との親睦を深める多くの機会が、樋口先生の主導の下に実現されました。なかでも、二〇一五年度から二〇一八年度の「留学生的愛知ガイド」と二〇一九年度の「留学生的愛知・東海ガイド」は日本人学生と留学生によるコラボとして、日本語のほ

か、中国語、韓国（朝鮮）語、スペイン語、ポルトガル語、時にはフランス語で発行されました。学部独自の取り組みとして銘記しておきたいと思います。

今年度の学部図書・紀要委員長のクラーマーは今年度より日本文化学部に着任したばかりで、樋口先生との付き合いは長いとは言えませんが、二〇二三年五月の歴史文化学科旅行の際に、お酒を酌み交わしながら気軽な雰囲気で、先生に学生の指導に当たっての心構えについてアドバイスをいただいたことが印象的でした。

二〇〇五年十月の着任以来、樋口先生とともに学部学科の国際交流に取り組んできた川畑は、樋口先生と研究室が隣り合っていることもあり、いつも気にかけていただいてきました。数えきれないほどの思い出があります。そのことはまた、尽きることのない人間的優しさに充たされた樋口先生の教育研究体系の真髄に、最も近くでふれる機会を与えられた一人であったことを意味しています。そうしたご縁から、今号の論集発行に際して、日本文化学部と関わりのある国内外の海外の研究者の方々との調整役を担いました。多くの方々からご寄稿いただきました。一人ひとりのお名前を列挙することはできませんが、世界の国々から参加してくださいました。ここに記して、深くお礼申し上げます。

愛知県立大学がまだ名古屋市瑞穂区の高田キャンパスにあった一九九五年十月にご着任された樋口先生のご経歴は、一九九八年の長久手キャンパスへの移転、二〇〇七年の法人化後の新愛知県立大学への移行に伴い、文学部一般教養から文学部日本文化学科、そして現在の日本文化学部歴史文化学科へと組織が変遷するこの大学の歴史とともに刻まれてきました。樋口先生の愛知県立大学での二八年半の足跡は、これからの日本文化学部、延いては愛知県立大学にとって、紛れもなく一つの大切な遺産になるはずです。そのことをはっきりと自覚しつつ、しかし私たちはなによりも、樋口先生がこの二八年半の教員生活を最後まで無事に勤め上げられたという事実を心から祝福し、感謝申し上げたいと思います。

樋口先生、本当にお疲れさまでした。

学部教員を代表して

図書・紀要委員長　クラーマー　スベン

川畑　博昭